



いつも幸せな気持ちにしてくれる 鈴木憲和 新任農林水産大臣の「中国滞在記」



外務省にて

日本僑報社主催、中国大使館および読売新聞などが後援する「忘れられない中国滞在エピソード」。2019年の第2回で、当時外務大臣政務官の鈴木憲和衆議院議員が特別寄稿し、中国大使館から「特別賞」を受けました。

特別賞受賞作は、初めての中国で出会った人の温かさ、異文化の只中でほどけていく心の軌跡を、穏やかな筆致でたどります。

■街角の親切

道に迷い、言葉に詰まった若い来訪者に、街角の人が身振り手振りで道順を示し、ときに数百メートルも一緒

に歩いてくれる。ほんの数分の出来事が胸に長く残り、見知らぬ都市の輪郭をやわらかくする。「知らない土地が、ふと“知っている場所”に変わる瞬間がある。」

■食堂のささやかな交流

食堂では、発音に苦労する注文を店員が根気よく聞き取り、隣席の人が笑顔で助け舟を出す。料理名を教え合い、箸の進め方を真似して笑い合ううちに、ぎこちなさが喜びに変わる。味の記憶は、そのまま人の記憶になる。

■ “現場” が教えてくれること

机上では抽象的な「相互理解」も、現場では具体的な表情と温度を伴う。寄稿は、政策や統計の手前にある生活の実感へと読者を連れ戻し、「まず現場に立つこと」の意味を端正に示します。

■ 結びの言葉

最後に置かれた一文は簡潔で、読む者の背中を静かに押します。「国と国の関係を動かすのは、最終的には人の心だと思う。」

外務政務官時代、鈴木氏は「現場の声に学ぶ姿勢」を繰り返し語りました。寄稿に刻まれた街角・食堂・通り雨の匂いは、人に寄り添いながら課題の要点を見抜く視線の出発点でした。それは、制度や枠組みの工夫を考えると、必ず“暮らしの側”から点検する癖として現在にもつながっています。

2025年10月21日、鈴木氏は農林水産大臣に就任しました。食と地域に関わる政策は、人の生活と密着する“現場の学び”を最も必要とする領域です。若き日の中

国体験で確かめた人への信頼と現場主義は、国内外の産地や食卓を結ぶ施策の芯となるはずです。

日本僑報社は、あ受賞作に流れるやさしいまなざしを原点として、今後のご活躍を心より祈念いたします。



第2回「忘れられない中国滞在エピソード」表彰式&交流会（2019年）

中友会会員による 中国滞在体験談 私の中国物語

「私の中国物語」その①

いつも幸せな気持ちにしてくれる、私にとっての中国

衆議院議員、前外務大臣政務官 鈴木 憲和

2005年1月、春節前の上海を初めて訪れた。

当時、農林水産省への入省が決まり、大学生最後の日々を海外旅行で過ごしていた私は、すっかり上海の魅力にとりつかれてしまった。前年末にニューヨークを訪れていた際に読んでいた冒険投資家が書いたある本の中で、次のような記述が頭から離れなくなってしまっていた。

「21世紀において、『オズの魔法使い』に出てくるエメラルドの都は、間違いなく、上海になるだろう。次のニューヨークは上海かもしれない」というものだ。

帰国した私は、早速、年が明けてすぐに初めての中国、

上海に飛んだ。余りの近さに、九州にでも旅行する感じだと思ったことを覚えている。そして、万博前の当時の上海の成長するエネルギーにすっかり魅せられた私は、友人を連れて1カ月後に再度上海を訪問することになる。いつか上海で、自分でビジネスしてみたいと思ったことは、今でも私の心の奥にくすぶりながら生き続けている。

振り返ると、私の身近なところには、常に中国の方がいたように思う。小さい頃、マンションの隣人は北京出身のご家族であり、時々お互いの家で餃子を作ったり、すき焼きを食べたりしていた。そして、高校生になった頃からは、母の友人であった中国茶のお店を営する上

海出身の方とも交流があった。みんな、気さくでバイタリティあふれる私の好きな方々である。そんな事もあり、大学入学とともに選択した第二外国語は自然と「中国語」となった。

二度目の訪中（上海）の際に、別の都市も見てみたいと思った私は、杭州にも足を伸ばした。西湖のあたりをブラブラしながら入ったファミレスで、ちょうど隣の席に座っていた同年代の中国の兄弟に話しかける。つたない中国語と筆談で、私が4月から農水省で働くことを話すと、「時間があるなら、龍井茶の畑を少し案内するよ」と言ってくれた。彼らの両親は、お茶の関連の仕事をしていたのだ。タクシーに乗り、普段は見ることのできない、ブランド茶である龍井茶の畑や茶畑の中にある農家の庭先での仕事の様子を見せてもらったことは、いい思い出だ。それ以来、一番好きな中国茶は龍井茶である。

お礼に何が出来るか聞いたら、「お金は受け取れない。これからは龍井茶を飲んでくれたらいい」と言うので、出来たばかりのピザハットでピザを3人で食べて、幸せな気持ちで杭州を後にした。

その後、2019年1月、外務省の政務官として仕事で久しぶりに訪れた中国。14年ぶりの訪中は、初めて訪れた北京である。故宮の大きさから感じる中国を統治することの大変さと、オリンピックも開催され成熟した都市としての北京を感じる事が出来た。今回の訪問は、日本産の米のPRイベントへの参加であった。そこで大変嬉しかったことは、参加者を一般から公募して行われた日本酒のイベントへの参加者のほとんどが、20代から30

代の若い世代であったことだ。私の地元の山形のいくつかの日本酒も含めて、様々な日本酒のテイastingをする同世代の姿に触れると、日中関係の未来は明るいことを確信する。2019年は、日中青少年交流推進年でもあり、次世代を担う日中双方の皆さんの交流を活発化させていきたい。もちろん、明るい日中関係に向けて政治レベルではさらなる努力をしなければならない。そして、成長する中国との経済レベルでの交流を、更にしていく必要がある。

何よりも、これまで私が出会った中国のみなさんは、本当に親切でバイタリティがあった。人と人との交流が、お互いの国のイメージを作っていく。そして、常に今の中国を自分の中で実感できるように、しばしば訪れたい。できれば多くの場所を。私自身も、明るい日中関係の未来のために、これからも努力していきたい。

最後に、寄稿する機会を頂いた段先生と、杭州出身で、日本語作文コンクールで最優秀賞をとったことを私に報告にきてくれた黄さんに感謝しています。黄さんが杭州出身であることから、当時の幸せな茶畑の風景が蘇りました。謝謝。

鈴木 憲和（すずき のりかず）

自由民主党 衆議院議員（三期）。1982年生まれ。開成高校、東京大学法学部を卒業後2005年農林水産省入省。2007年、内閣官房「美しい国づくり」推進室に出向。消費・安全局表示・規格課法令係長、同局総務課総括係長を経て、2012年農林水産省退職。同年12月、第46回衆議院議員総選挙にて山形県第二区から初当選。2014年、第47回衆議院議員総選挙にて第二期再選、2017年、第48回衆議院議員総選挙にて第三期再選。2018年、外務大臣政務官に任命される（～2019年）。2025年10月、農林水産大臣に就任。



日本僑報社主催の第14回「中国人の日本語作文コンクール」最優秀賞（日本大使賞）を受賞した黄安琪さんが、副賞の「日本一週間招待」で来日した際、東京・霞が関の外務省へ鈴木憲和外務大臣政務官（当時）を表敬訪問した

「私の中国物語」その②

忘れ難きあの中国語の一言

大学教員 興津 正信



大連留学中に親しくなった中国友人のFさんと。彼女のお爺さんの一言が忘れられない

1993年冬のある日。当時大学4年生で、大連に留学中だった私は、中国人の友人Fさんから、「おじいちゃんの誕生日パーティーがあるから、うちに来ない？」と誘われた。中国の一般的な家庭料理を味わえるのはめったにないことだし、留学中であっても意外と中国人と親密に交流する機会が少なかったので、喜んで何うことにした。授業で学んだ中国語を、教室の決まった流れじゃなく、実践的に試せる！という高揚感もあった。

Fさんとは、寒さ対策にコートか帽子を買おうと思って、服装市場に行った時に知り合った。その服装市場は、個人経営のようなお店が所狭しと集まっているところで、その中で、靴だけが置いてある店があったので少し覗いていると、歳は自分と同じぐらいの若い女性店員が急に英語で話しかけてきた。一緒にいた日本人と日本語で話していたから、すぐ外国人とわかったの英語での話しかけだったと思うが、なんか頭にきてしまい、私は中国語で「只有看一看（ただ見てるだけ！）。と無愛想に言い返したら、「哦！你说汉语说得不错！（あら、中国語上手ですね）。と微笑んでくれた。その店員がFさん。これがきっかけで、Fさんと親しくなった。一年間だけの私費留学で大連に来ている私は、いずれ日本へ帰国するので、Fさんと付き合うとかはあり得ないなあと思っていた。それでも、Fさんやその友達と公園でバドミントンしたり、時にはFさんと二人きりでボートデートしたり、カフェでお茶したり、美術館に行ったり、CDショップで買い物したりと、私の留学生活に潤いを与えてく

れて、楽しい思い出となった。また私は少なからずFさんに好意を抱いていたので、授業で学んだ中国語をFさんに試したり、Fさんに気に入ってもらおうと一所懸命話したりしたので、私の中国語はこれでグーンと伸びたと思っている。

そして、1993年冬のある日。

Fさんから「今度うちでご飯を食べない？おじいちゃんの誕生日パーティーをするのよ」と、初めてご自宅へ招待された。Fさんからの誘いは単純にうれしかったので、当然受けた。

Fさんのお父さん、お母さん、そして、お兄さんも北京での出稼ぎから帰ってきたところで、お爺さんを囲んで、にぎやかな宴となった。その頃までは私はあまりお酒を飲むことがなかったが、お爺さんがずっと隣で、ビールを片手にいろいろと語ってくれていたの、なんか私も釣られて飲むようになった。

しばらくして、何で急にそんな重い話になったのか覚えていないが、日中戦争の話、つまり、歴史問題の話になった。

当然、私が日本人であることはその場にいる全員がわかっていることであるが、お爺さんの口調がだんだんと厳しく、重く、ある意味、私を責めている感じになってきた。Fさんが耐えかねて、お爺さんをなだめながら、そういう話はやめましょうみたいに言っていたが、お爺さんの話は止まらなかった。そして、そのお爺さんが私の目を見て言った一言。

「我哥被你们杀了！（私の兄はお前たちに殺されたんだ！）。

私はこの大連留学以前より、大学の中国研究会という学生サークルに所属していたこともあって、語学学習だけではなく、日中戦争のことなど、日本がした中国への侵略行為についても、友人とディスカッションしたり、関連の本を読んだりしていた。だから、私は、日中両国の間にある歴史問題についても知っているし、問題意識は高く持っていると思っていた。

しかし、この時のお爺さんの一言、この中国語の一言は、自分が今まで座学でやっていたことをすべて無にするかのような破壊力があつた。

同情、謝罪、悔しさ、怒り、虚しさ、遣り切れなさ、憐れみ、恨み……そのすべてが圧縮された感情がその場で自分に迫ってきたという感覚をいまも覚えている。

歴史問題をとことん追究していけば、さまざまな仮説が生まれ、解釈が生まれ、カラクリが暴かれていくだろう。日中双方にとっても認めたくないような事実がつきつけられるかもしれない。

市井の人であれば、留学生であれば、政治家であれば、研究者であれば、教育者であれば、いろいろな立場を想定して、考えたこともある。しかし、やはり、それ以上に、このお爺さんの一言をどう胸に刻み、意識の中に留めておくか。これこそが、私自身が中国と関わってきた今まで、そして、今後も関わり続けていくなら、永遠

に問いかけ続けていかなければならない最重要課題だと思っている。

私の中国滞在歴は、大連の遼寧師範大学留学で1年、天津の南開大学留学で1年、そして、天津で日本語教師として働いた6年半で、合わせて9年弱あり、その間、多くの中国人と出会い、たくさんのすてきな中国語のこトバを教わった。その中でも、このお爺さんのこの中国語の一言だけは一字一句違わず覚えているのである。

興津 正信（おきつ まさのぶ）

1971年埼玉県生まれ。創価大学文学部卒業、一旦は不動産会社に勤めたが、杏林大学大学院修士課程、大東文化大学大学院博士課程と在籍（2009年単位取得退学）。中国の環境問題を研究していたが、2008年から約7年間、天津で日本語教師をしてから、日本語教育に従事。現在、埼玉県在住の中国帰国者（中国残留日本人等）及び都内の日本語学校の留学生に日本語を教えている。

「私の中国物語」その③

燃えたね、重慶。火鍋で変面！

旅行作家 関 有代



重慶の四川鍋レストランにて

私の旅の楽しみの一つとして観劇があるが、旅行作家として世界50カ国あまりに出かけた中でも、中国四川省が誇る伝統芸能「変面」のパフォーマンスの凄さには、度肝を抜かれた。

中国はお気に入りの国で、3回目の訪問になる。一度目は30年以上前、仕事仲間と上海へ。外灘や文学者魯迅公園が印象的だった。2度目は家族で北京と桂林。紫禁城と万里の長城、いつもニュースで見る天安門広場に感動したのと、桂林の川下りはまさに水墨画の世界で、幻想的だったのを忘れない。最後は重慶。話題のLCCに一度乗ってみたかったのだ。成田空港第3ターミナルから春秋航空で四川省へ。機内食がないので、名物とんがらし麺を買い、お湯を入れてもらった。

空港では、重慶の美人ガイドがお出迎え。重慶は日本では川崎のような地域で、私が泊まるホテルは、霞ヶ関のようなエリアだと説明してくれた。

夕食は楽しみにしていた本場の四川鍋。北京で共産党大会を終え、重慶に戻ってきた記者の友人と、彼の秘書との3人で火鍋を囲んだ。お店の入り口で泳ぐ真っ赤な縁起物の金魚は、千客万来の意味があるという。その横では胡弓と琵琶が歓迎の演奏を奏でている。ドライアイス漂う銀の皿の上で、スタミナがつくという豚の血を固めた腸が運ばれてきた時は驚いた。センマイやキノコも大きい。生のどじょうと豚の血と豆腐は、まずは鍋の底に沈めるといのもダイナミックだ。他の具材はしゃぶしゃぶでいただく。四川鍋は思った以上に辛くはなく、野菜も豊富なのでヘルシーだった。美味しさがほとぼしる火鍋を囲みながら、豊富な食材に夢中になっていると、いきなりレストラン内でショータイムが始まった。

ドラの音が響き、軽快な音楽と共に何が始まるかとワクワクしていると、冠を被り、派手なマントを纏った男性が、扇子を持ってカンフーのように踊り出した。テーマソングがまるでプロレスの入場曲のようで、テンションが上がり、いいっ！ 出がけに毎朝聴きたいくらい、粹でカッコよく、まるで後樂園ホールにいるような気分になる。

「変変変変、看看看ー！ 変わった、変わった……、
見てみて……」

日本人や子供にもわかりやすい歌詞だ。原色のお面の前に扇子をかざした瞬間、絵柄が次々と変わっていく。最初は一体何があったか気づかぬまま、あっ！となった瞬間、身体中に電流が走り衝撃を受けた。

重慶出身の秘書に、変面は700年近い歴史を持つ伝統大道芸だと説明された。国家機密ではないが、謎に包まれた一子相伝の秘技である。幼い頃から修行をし、変面師という資格もあるという。何枚ものお面を剥がすパフォーマンスの中にも技はたくさんあり、飛んだ瞬間にお面が変わる震面、両手を大きく開いた瞬間にお面が次々変わる左右開弓、両手両足を開いたままお面を変える空手変面、口に花をくわえたまま変化する花嚙変面、とどめは火を噴く大技噴火などがある。素顔に戻り、振り向きざまに再びお面をつけるのも、いずれも機敏な動作が必要とされる。

ショーの後半は、いきなり口から火を噴いた。顔の模様が秒速でバンバン変わる様子に腰を抜かす。これは火鍋じゃなく、火面なのかつ!? 赤、黄、白、青、黒と変幻自在、瞬く間に顔のお面が変わる。私の目の前に来て握手をした瞬間にも、お面が変わったのが怖くもあり、新鮮だった。

どこから見てもわからない、狐につままれた不思議な状態。これぞカルチャーショック！絶妙で巧みな神業とも言える秘伝の技巧と、活気溢れる掛け声の凄さ圧倒された。中でも「金銭手」という両手でお金の形を作るポーズは、「皆様がお金持ちになりますように」という意味があり、中国人は、このポーズが大好きだという。

たちまち気分がアガって大ファンになり、エンディングの後「ブラボー！」と変面師に駆け寄り、ガッツポーズと一緒に記念写真を撮ってもらった。まさに芸人魂は万国共通で、いつか東京に招待したいと願うほど素晴らしいかった。

「昨日まで雨だったのに、彼女が重慶に来てから、ずっと晴れているんですよ！」

日本から来た晴れ女だと、記者が変面の周さんに私を紹介してくれた。

「あなたは、裕福な人ですね」

周さんはお面を取って、満面の笑みで握手してくれた。ここでいう裕福とは、金持ちという意味ではなく、天真爛漫ということらしい。

興奮冷めやらぬまま、日本に帰ってからもしばらくは変面の歌ばかり聴いていた。「自分がプロレスラーか正義の味方になって、登場する時にかけたい曲だわ」と妄想までしながら。

帰国後、中国人の友人から「変面は無形文化財であり国家の財宝、中華人民共和国の国宝に指定されている」と聞き、納得した。なるほど、昨日や今日のものではないのである。

翌年の年賀状は、「今年の思い出No.1 変面！」にした。問い合わせがあるとアツク話すが、重慶の旅以来、私の楽しみである。

関 有代（せき すみよ）

東京都目黒生まれ。『宣伝会議コピーライター養成講座』を出て、コピーライターを数年経験後、旅行作家に。世界50カ国以上を旅して、様々なパフォーマンスに出逢い、各国各界に多彩な人脈を持つ。2019年から人生発のトカイナカ（都会田舎）暮らしをムーミン谷（飯能）で始め、日本の良さを再認識している。

「私の中国物語」その③

上海での結婚式

国会議員事務所職員 小山 真理

「訪問の目的は？」と聞かれたときのために「友人の結婚式に参列するんです」という答えを用意して臨んだ入国審査では、スタンプを押されたパスポートが無言で返されただけだった。

一度目の中国は大学4年生の時。大学の同じゼミだった留学生カップルが帰省するということで、せっかくだから、ともしっかり理由を付け、押しかけのような形で友

人何人かと訪問した。彼らが案内してくれる上海は、ガイドブックに載っているところから路地裏の行きつけの店まで幅広く、夕食の時に雨が降り出したらお父さんが傘を持ってきてくれるという大サービスまで付いていた。

2年後の2006年6月6日。6の重なる縁起の良い日取りに彼らが上海で挙式をするというので、私にも招待状を送ってくれた。失礼がないようにと思い、ネットで中国

の結婚式事情を調べた。ご祝儀袋は赤がいいのね。白はお葬式の色だから極力使わないようにしましょう。着物で行こうとしていたけれど、半衿くらいなら白でも大丈夫かな。え、Tシャツにジーンズで披露宴に出る人もいるの？でも日本に留学していた二人の結婚式なんだし、鮫小紋みたいな柄なら大丈夫よね。着付けは何とかなんとかして、ヘアセットはどうしよう。そうだ、前に上海に行ったときに毎日美容室でシャンプーしてもらっていた。夜遅くまでやっていたし、ホテルの近所の美容室でお願いしてみよう。椅子に座りながら泡立ててもらおうシャンプー、面白かったなあ。思いを巡らせながらの旅支度もまた楽しいものだった。

入国後は、友人である新郎とその家族に招待され、上海の高層マンションにある新居に案内してもらった。和室までも有する広々とした室内には精巧な切り紙で作られた飾りがあちこちに飾られていた。大量の爆竹やたばこは、翌日の挙式前に新婦を迎えに行くときに家の前で妨害されるので、賄賂として渡して道をあけてもらうために使うんだ、という話もしてくれた。ベッドにはお人形や卵が置かれ、それぞれがいわれのある縁起物だ、ということも教えてもらい、文化の違いを実感した。

夕食を戴いて辞去し、ホテルに戻った。周辺には夜遅くまでやっている美容室が多く、フロントでお勧めだと教わった店に入る。お決まりのシャンプーが始まってから美容師さんに、明日、挙式参列用にヘアセットをして貰いたい、という旨を英語で伝えた。担当の彼は困った顔をして同僚を呼ぶと、夜で閑散とした店内にはあっという間に私を囲んだ輪が出来た。英語が伝わらない。だが、私にはこの地をルーツとする漢字の知識がある。持ってきてくれた紙とペンを使い、ああでもない、こうでもない筆談が始まった。なかなか伝わらなかったヘアセットは中国語で「設計」ということが分かり、翌日の予約も無事に取れ、私の髪の毛も「吹干」され、賑やかなギャラリーのままお会計までわいわいと見送られ店を出た。

翌朝、再度訪問するとその店で一番上手だというカリスマ感漂う男性美容師が担当してくれた。日本では必ず「多いですね」と言われる毛量の私の髪を、スプレーだけでアップにしてくれる技量を発揮し、見たことのないカラスプレーで髪が彩られた。ちょっと派手かな、と心配したがホテルに戻り着物を着てみると意外と悪くなく、お礼を言うためにもう一度その美容室に戻った。着物姿に大変喜んでくれ、皆で写真撮影をし、彼らが呼ん

でくれたタクシーで無事に会場に向かうことが出来た。

挙式は、数年前まで一般人は立ち入りが出来なかったという立派な迎賓施設の美しく整えられた庭で、人前式の形式で行われた。すっきりと晴れた青空とどこまでも続きそうな緑の芝生のコントラストは鮮やかで、シンプルなデザインながらも質の良さが際立つウエディングドレスの白に生花のフラワーシャワーがくっきりと映える様子は、まるでドラマを観ているようだった。お人形のようにきれいな新婦と、お人形のように固まった新郎の対比の微笑ましさももちろん印象的で、それを優しく見守る両家の親族の穏やかさも伝わってくる幸せな時間だった。

午後6時6分に始まった披露宴は600人を超える大所帯で、それでも「呼びきれなかったから明後日もう一回、300人くらいを呼んでやるんだよ」と当人たちは笑っていたが、3時間を超える披露宴のなかでカラードレス、チャイナドレスなど何回もお色直しをして登場する彼らはどれも目を見張る美しさで、まるでファッションショーのようだった。また二人が中座している間、私の着物姿を見た他のゲストが何人も話しかけに来てくれ、温かに歓迎してくれている雰囲気がとても嬉しかった。

その後、彼らには可愛い女の子が産まれた。昨日のことのように上海での結婚式のことを覚えている私をよそに、その子ももうあの頃の私たちの歳に近づいてきている。時の流れのあまりの速さに慄きながらも、温かく美しいあの時間は私の大切な経験として輝いている。



上海虹橋迎賓館での結婚式の様子。人前式後に同級生で記念撮影

小山 真理 (こやま まり)

1982年水戸市生まれ。茨城大学人文学部在学中に中東、ヨーロッパ、東南アジアを歴訪。大学4年次に同じゼミに所属していた中国人留学生の帰省に合わせ中国・上海に初訪問する。卒業後、彼らの結婚式への参列を含め、中国訪問は2回。大手証券会社・損害保険会社での勤務を経て、結婚・出産。現在は小学生の子ども二人の育児の傍ら、参議院議員の茨城事務所で働く。